

(別紙2)

論文審査の結果の要旨

氏名 小林 ふみ子

本論文は、天明期以後、江戸を中心として大流行したいわゆる天明狂歌の特質を、多角的な視点から明らかにしたものである。従来の天明狂歌研究は、その中心と目される大田南畝の書誌学的・伝記的研究、もしくは連・側などと呼ばれる狂歌師グループの人員構成や、グループ相互の友好・対立関係に関する研究に偏っていたが、本論文は、点取り狂歌、狂歌摺物など、狂歌の興行形態や作品の出版に関わる実態を追究し、また南畝の雅俗意識や言語遊戯への関心の特徴を明らかにし、さらには南畝以外の天明狂歌壇の重要人物である元木綱・鹿都部真顔・智恵内子らの事績や詠歌の特徴を詳細に検討して、天明狂歌の新しい像を描き出している。

第一章では、天明狂歌の本質や、興行・出版の実態に触れる。狂名により韜晦をはかろうとする意識が狂歌大衆化によって徐々に薄れていき、狂歌がむしろ自己顕示・自己宣伝の手段となってゆくという明快な指摘や、狂歌合から、俳諧・雑俳にならった点取り狂歌への興行形態の展開を跡づける考察は、従来まったく閑却されてきた重要な問題を明らかにしている。

また第二章では、南畝の文事の意義を新しい観点から探っている。特に、それまでの江戸狂歌の伝統とは無関係だと思われていた南畝が、江戸の初期狂歌に相当の関心を持ち、藤本由己からの影響が見られるという指摘や、漢文作品「七観」に戯作や狂文に共通する要素が多く、そこに雅俗を峻別しない南畝独自の意識が表れているという言及は、新たな南畝像を提示し得ている。

さらに第三章では、一時南畝と並ぶ勢力を誇った元木綱・智恵内子夫妻、有力門人である鹿都部真顔を取り上げる。言語遊戯に徹する南畝と異なって、元木綱・智恵内子夫妻は狂歌を自己表現の手段・形式としたとし、また機知と過激な滑稽を好む南畝に対し、温雅な真顔の詠風が、その後の狂歌壇の主流となっていく経緯を論じて、多様な天明狂歌のあり方を闡明している。

本論文であまり触れられていない朱楽菅公・唐衣橘洲らの動向や、狂歌と戯作の関係等、今後の課題とすべきところはあるが、従来等閑視されていた天明狂歌の特質を、狂歌師の伝記資料から狂歌の一枚摺にいたる厩大な資料を駆使して、明確な史的展望のもとに描き切った点は、画期的なものと評価できる。よって審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に相当するものと判断する。